平 成 ２ ７ 年 度　自 己 評 価 表

中期目標（学校ビジョン）
１ 主体的に学び、自分の言葉で表現できる生徒を育成する。
２ チームで取り組む経験を通し、互いの多様性を知るとともに自己有用感を高める。
３ 地域連携の主体となり、地域に根差した学校としての役割を果たす。（地域の教育センター）

今年度の重点目標
１ 八頭高生らしい態度の育成 （①基本的生活習慣を整える ②学習と部活動の両立 ③自治精神に満ちた生徒の活発な活動 ④他者を思いやり良好な人間関係が築ける）
２ 授業改革と主体的学習者の育成
３ コース(探究・総合・体育)における特色ある教育活動の推進
４ 八頭タワープロジェクトの充実

評価基準 A:十分達成〔90%〕 B:概ね達成〔80%程度〕 C:変化の兆し〔60%程度〕 D:まだ不十分〔40%程度〕 E:目標・方策の見直し〔30%以下〕

平 成 28 年 2 月 23 日
鳥 取 県 立 八 頭 高 等 学 校

年 度 当 初							
評価項目	評価の具体項目	H27年度4月 現状	H27年度 目標 （年度末の目指す姿）	H27年度当初 方策	経過・達成状況	評価	改善方策
Ⅰ 八頭高生らしい態度の育成	1 基本的生活習慣を整える	(1)制服の着こなしについて生徒の意識が向上している。頭髪については再指導の生徒が少数いる。 (2)H26年度は通学についての苦情がH25年度に比べ激減している。地域の方々より信頼されるような態度を育みたい。校内では、学年の進行に伴って挨拶ができるようになっている。 (3)「予鈴で着席するなど授業時間を大切にしている」と回答した生徒が93%。「生徒は授業時間を大切にして学力の向上に取り組んでいる」と回答した職員が77%。（H26学校評価アンケートより）授業規律は概ね良いが、生徒と職員の回答の差が意味するところに課題がある。 (4)保護者への生活指導の方針の周知度が60%である。（H26学校評価アンケート）保健室の内科的利用者数及び欠席者数は減少傾向にある。	自己有用感を高め、自主性や自律性を育む土台を作るため、以下の基本的生活習慣が確立している。 (1)学校生活での必要な決まりに関する生活習慣（「時間を守る・物を大切にする・服装を整えるなど） (2)集団生活に関わる生活習慣（挨拶や言葉遣い、礼儀を正し、マナーを身に付けるなど社会性や規範意識） 地域の方々への挨拶励行 (3)学校での活動を行う上での生活習慣（授業規律や態度、忘れ物をしないなど） (4)家庭教育で育まれてきた「睡眠習慣・食事習慣・規範意識・挨拶言葉遣い・マナーなど」の生活習慣が不規則にならないよう保護者と十分な連携を取る。特にスマートフォンなどの通信端末の利用については家庭教育を中心に適正な活用ができるようにする。また、欠席者の減少を目指す。	(1)～(3)基本的生活習慣は、これから一生ついてまわるものである。正しい生活習慣の意識づけや習慣ができるよう、日々の学校生活の中で全教職員が継続的な声掛けを実施し、定期的な頭髪・服装検査も実施する。また、マナーアップさわやか運動への積極的参加や、保護者との連携を密にして指導し、部活動指導とも関連付けて習慣化していく。 (4)PTA総会などを利用しながら通信端末の適正な利用について保護者へ広く周知を図り、理解をさらに深め、落ち着いた環境で学校生活を送れるようにする。	(1)～(3) 基本的生活習慣については、全教職員が共通理解のもと継続的な生徒への声掛けを心掛け、日々の学校生活の中で指導してきたが、日常の中で挨拶をする習慣等、細かな部分の徹底を目指したい。 定期的な頭髪・服装検査、職員の校内巡視等を実施し、日常の生活の中で自律心を高め自主的に改善が図られるようにした。おおむね良好な状態といえるのではないか。 このことについては、保護者との連携を図り、相互の協力体制のもと指導してきたが、学年団、部活動指導とも関連付けて基本的生活習慣の定着のめざしたい。 また、高校生マナーアップさわやか運動や交通安全運動等関係機関が実施する事業への積極的参加を通して公共マナーを身につける機会をつくった。 一方で、スマートフォンなどの通信端末の利用についての適正な利用がまだまだできていないところもあるが、預かり指導の件数でみると、25年度53件、26年度57件、27年度1月現在33件で今後に期待できる状況ではある。line、ツィッター等は利用マナーの指導徹底を呼びかけていくしかない。 「予鈴」での着席・授業の準備については徹底したい。 (4)PTA研修会等を開催し保護者との連携及びPTA活動（専門委員会等）の活性化を目指した。12月末時点の欠席者（病欠）は述べ1988名であった。（H26年12月末 2038名）	B	(1)～(3)生徒一人ひとりが家庭での生活を含め1日の生活を自己管理できるよう支援を行い、学校生活の中の授業に向かう姿勢や部活動への取り組みがより良いものになるようにしたい。 生徒が規律ある学校生活を送るための支援を教職員相互の協力を密にすることにより強化していく。 (4)通信端末の適切な利用については個人が所有するものなので校外での使用状況を把握することは難しい。適切な利用に向けて保護者の理解を含め研修会等の充実を図る必要がある。また、より一層の効果が出るよう日常の生活の中で継続的に「声かけ」を行う。 PTA専門委員会等の活性化を図り、保護者側からの支援の方法を模索することも必要である。
	2 学習と部活動の両立	(1)「学習と部活動をほぼ両立できている」との回答が生徒61%、保護者76%、教職員46%であった。（H26学校評価アンケート）。生徒・保護者・教職員があるべき姿を共有し、回答の格差を解消したい。 (2)計画をたてて学習に取り組む生徒が少ない（H26高等学校課アンケート44.6%） (3)H26年12月現在部活動加入率は88.5%（兼部なし）	高校生にとって学業への専念が第一義である。一方、高校時代の課外活動の経験は何事にも代えがたい価値がある。各活動にけじめをつけることで両者を両立させたい。 (1)「学習と部活動をほぼ両立できている」について生徒・保護者・教職員の回答が前年度を上回り、回答の格差が減少している。（H27学校評価アンケート）。 (2)両立の結果として「計画性のある学習をする」生徒の増加（H27アンケート項目追加） (3)加入率の維持。（5月、10月部員数調査）	(1)学習と部活動のけじめをつける方策のひとつとして「部活動開始・終了時刻の厳守」に全職員で取組む。（終了時刻は18:20、部活動延長時19:00） (2)平日と休日の時間の使い方について、生徒ひとり一人が計画を立てて取り組むことができるよう支援する。時には、部活動顧問が学習の場を積極的に設けるなど学習時間を保障したり、学習が不十分な生徒の部活動を制限する。 (3)部活動顧問が、中途離脱傾向生徒へ面談等による支援をする。	(1)(2)模試実施日および考査期間中の部活動については管理職に申請し許可を得た部のみが行うこととした。周知も徹底し、概ね混乱なく取り組むことができた。しかしながら、部活動の終了時刻については一部部活動で守られていない現状があり、自主練習後かなり遅くなってから帰途についている生徒が散見される。 部活動と学習とを両立できていると感じている生徒は7月調査時とほぼ変わらず1年生19%, 2年生21%であった。一方で、今年度新規調査項目とした「計画性のある学習をする」生徒は全校で35%(1年28%, 2年42%)であり、7月調査を下回った。また、1年生で77%、2年生で63%の生徒が平日の自宅での学習時間が1時間程度以下(12月調査)であり、両立できているとはいえない状況である。 (3)部員についての面談、カウンセリングは部活動の一環として日常的に実施。生徒の状況については顧問と担任との連絡が密に行われている。 1月25日現在の部活動加入率は89.4%（1, 2年生）である。	C	(1)～(3)いずれについても、職員が生徒の全人的な成長を支援する立場にあることを意識し、教科指導の観点、生活指導の観点、部活指導の観点を共有しながら、H27年度の当初の方策を遂行する努力をする。
	3 自治精神に満ちた生徒の活発な活動	(1)H26年度は、朝の挨拶運動を毎日実施できた。 (2)翠陵祭を日程通り開催し、中学生対象「八頭高ライフ体験事業」では生徒会執行部員が企画～運営まで主体となって取組み、事業を成功させた。 (3)各委員会とも年間を通じて活発に活動した。	(1)生徒主体の啓発活動が年間を通じて実施されている。 (2)中学生体験入学・翠陵祭・八頭高ライフ体験において、生徒が主体となって企画・実施に取り組み、達成体験を積み重ね、自治精神を醸成する。 (3)委員会活動を翠陵祭などにおいて発表する。	(1)～(3)「愛し愛され運動」を校外でも展開し、その活動を深めるために生徒会執行部員の県外研修の機会を設ける。 その中で生徒会活動活性化に向けた新しい活動目標を設定する。生徒主体の委員会活動をさらに推進する。	(1)「八頭高愛し愛され運動」は6月と12月に実施し、延べ280名を超える生徒が参加して、地域や校内の清掃活動を行った。 また、生徒会長と副会長の3名が島根県立隠岐島前高校を訪問し、高校生どうしの意見交換を行い、地域活動の発表会を聴講した。 (2)中学生体験入学、翠陵祭、八頭高ライフ体験では、生徒会執行部を中心に活動し、予定通り行った。 (3)翠陵祭では、生徒会執行部、保健委員会が発表を行った。	A	(1)～(3) 「八頭高愛し愛され運動」については、清掃活動に止まらず、学校や地域に貢献できる他の活動を検討する。 訪問校との交流を継続しつつ、意見交換等で得た知見を今後の生徒会活動に活かしていく。
	4 他者を思いやり良好な人間関係が築ける	(1)すすんでボランティアに参加する学校文化が醸成されつつある。（H26年度ボランティア参加者延べ70名 愛し愛され運動延べ220名） (2)特別活動・総合的な学習において、生徒の体験活動が少ない。 (3)ハイパーQUを実施している。 (4)すべてのクラスで人権教育LHR推進委員（生徒）とともに人権教育LHRを実施している。	(1)積極的にボランティア活動に参加し、地域社会で様々な年齢の方と交流する。 (2)様々な場面で協働して取り組む活動が活発に行われている。 (3)ハイパーQUが有効に活用される。 (4)クラスの現状や生活の中にある問題をとらえ、生徒の関心や生活実態に即した人権教育LHRが実施されている。	(1)積極的なボランティア活動の呼びかけを行う。 (2)総合的な学習・特別活動において、協働して取り組む体験活動や自己理解・他者理解・自律に向けた人間関係づくりを充実する。 (3)ハイパーQUを実施し、的確な分析による生徒支援に取り組む。 (4)クラスの現状や生活の中にある問題をとらえ、生徒の関心や生活実態に即した教材化に努める。	(1)地域のボランティアに61名の生徒が積極的に参加した。 (2)特別活動では協働的な活動が随時行われているが、総合的な学習の時間としての協働的な取組の場を設定することができなかった。 (3)ハイパーQUの結果を基にクラス毎に担任、SC、教育相談担当とで検討を行い、クラス運営の改善や生徒支援に取り組んだ。クラスの現状や問題をとらえ、臨時のケース会議を持つなどしながら多くの職員が関わって、生徒間の良好な人間関係が築けるよう指導した。 (4)人権教育LHR実施の翌日に推進委員会を開催し、振り返りを実施した。振り返りの結果を各担任に伝え、次回のLHRの立案の参考としていただいた。	B	(1)継続的に取り組む。 (2)28年度の取組が激変して職員の負担増に繋がらないように配慮しながら、現行の枠組みの中でできる形で実施する。 (3)～(4)継続的に取り組む
Ⅱ 授業改革と主体的学習者の育成	1 授業改革	(1)H26年度は国、公民、数、理、保体、英で研究授業を実施し研究協議を行った。 (2)アクティブラーニングに関する個々の取組みはあるが、見学授業は十分に活用できず、学校全体としての取組みに至らない。 (3)H26年度校内外の授業改善に関する研修会への参加率は87.7%であった。アクティブラーニングに関する県外研修にも多く参加するが、その成果を共有する場面がない。	(1)全教科で研究授業を実施している。 (2)相互授業参観と意見交換が行われている。 (3)授業改革に関する研修、研究会に職員の70%以上が参加し、アクティブラーニングに関する校内授業研修会を開催する。	(1)(2)6月、10月を研究授業月間とし、全ての教科が研究授業を実施する。特に県外研修会については職員会議で成果を発表する。 (3)校内授業研究会を開催する。また校外の研究会・研修会へ出席し、教科会などでその成果を共有する。	(1)(2)6月にアクティブラーニングの先進校である岐阜県立可児高校を訪問し、その内容を8月職員会議で報告した。7月には、校内のアクティブラーニング実施状況について教員アンケート調査を実施し、8月職員会議で報告した。また、2月にもアンケートを実施して、研修後の状況を追跡し、次年度の授業改革に向けた参考資料とする。 (3)7、8月に開催された県外の研修会には5教科計8名が参加した。9月には岐阜県立可児高校から講師を招き、理科と数学についてアクティブラーニングの公開授業を行った。その他にも教科ごとに研修、研究会を行っており、90%以上の教員がいずれかの研究会に参加した。	A	(1)～(3) 2回のアンケート結果と授業研究会を踏まえ、成果と課題を共有し、次年度に向けた授業改革の方針を検討する。 次年度は、6月と9月に授業研究会を計画しており、全教員の参加を目指す。

年　度　当　初					評価結果　3月		
評価項目	評価の具体項目	H27年度4月　現状	H27年度　目標 （年度末の目指す姿）	H27年度当初　方策	経過・達成状況	評価	改善方策
Ⅱ　授業改革と主体的学習者の育成	2 主体的学習者の育成	(1)生徒が主体となる教育活動が少ない。 (2)毎日自宅で学習する生徒が64%（H26学校評価アンケート） (3)平日の自宅学習時間　2時間半以上の1年24.1%（H25年とほぼ同じ，H26年4月より減少）、2年17.5%（H25年より減少，H26年4月より増加）、4時間以上の3年30.2%（H25年より減少，H26年4月より増加）（H26年度11月自宅学習調査）。また、課題以外の内容への取組みができる生徒が少ない。 (4)外部模試における成績維持（3科全国SS±1ポイント）または向上者は、1年生で167名（60%）、2年生で138名（53%）であった。	(1)生徒が主体となった活動や生徒同士が学び合う活動を通して成功体験・失敗体験を積み重ね、自己有用感が高まり自律に向かう。 (2)毎日欠かさず自宅で学習する生徒が100%。課題以外の内容への取組みができる生徒が増える。 (3)自宅学習学年目標時間達成率が向上。（1年2時間 2年3時間 3年4時間） (4)スタディサポートにおける到達度（個人）の維持向上率100%。	(1)生徒主体の活動には教職員の十分な準備・支援が不可欠である。会議の精選や業務改善を進め、生徒と向き合う余裕をつくる。 (2)個人面談を継続し（年間）、生徒の学習方策習得を具体的に指導する。 (3)家庭学習につながる授業を行い、テスト、課題を適切に配置し、目標を一つずつ達成させる。自学する環境（自習室等）を整備する。また、授業・面談・集会などの機会に自主学習の内容について啓発する。 (4)3年間を見据えた教科指導・模試分析を教科・学年で組織的に取り組む。面談研修を活用し、効果的な面談を実施する。	(1)旧主任会を火曜2限に固定化、会議時間の短縮などにより、日に2本の会議を行ったりする余裕が生まれ、放課後に時間を確保できる日が増えたと認識している。ただし、会議のない放課後に3年生の補習が計画されていることもあり、生徒と向き合う時間の確保が難しいこともある。 (2)面接期間は十分ではないが必要に応じて実施していただいている。 (3)1年生はすべての授業で4月第1回目にガイダンスを実施。3年生は放課後自習室、1・2年生は考査前の土曜日に質問教室を実施。土曜質問教室は初めての取組であったが多くの生徒が参加し学習に取り組んだ。しかしながら1年生で77%、2年生で63%の生徒が平日の自宅での学習時間が1時間程度以下(12月調査)であり、主体的に学習に取り組んでいるとはいえない状況である。 (4)11月進研模試において，2年生は7月期より成績が全体的にやや下降し、1年生はどの学力層も7月期とほぼ同じ分布となっている（いずれも3科総合）。	C	(1)～(4)継続して取り組む。
	3 進路意識の高揚	(1)H26年11月志望調査では、「未定」の生徒が4月当初より減少した。 (2)進路実現のため目標に向かって努力している生徒は、1年:70%，2年：69%，3年93%，全体77%（H26学校評価アンケート）。職員の面談研修「心理学の手法を用いた面談」を2度実施。学年ごとで計画された進路学習を実施。1年職業観の育成、学問研究　2年学部学科研究　3年入試研究。 (3)進路学習により主に国公立大学を対象とした学部学科研究を行った。国公立大学志望者割合は、1年生がH26年4月66%から11月75%に増加、2年生が4月59%から11月57%とほぼ変わらなかった。夢ナビライブには2年生希望者41名が参加。 (4)学年ごとに進路講演会を開催し、進路意識の向上をはかった。一方、H26年度の大学入試センター試験出願者は156名で、H25年度（163名）H24年度（219名）より減少した。	(1)進路志望調査「未定」の回答割合が学年進行にともなって減る。 (2)「自分の進路を実現するために努力している」生徒の割合が学年進行に伴って増加している。（H27学校評価アンケート） (3)国公立大学志望者数と現役合格者数の増加 (4)大学入試センター試験出願者数の増加	(1)面談研修などのスキルも活用しながら生徒との面談を重ね、進路目標をより明確にさせる。 (2)(3)動機づけに資する進路設定ストーリーを再構築し、ひとつひとつの取組みに連動性を持たせる。 (4)高い進路目標を維持させるよう指導し、より多くの生徒がセンター試験へ向かえるよう学力をつけさせる。また保護者に対して進路関係の情報を伝達する進路講演会や研修会などを設ける。	(1)進路志望未定者の推移は次の通り。1年54名（4月）→7名，2年19名（1年4月）→4名（2年11月），3年29名（1年4月）→1名（3年11月）。面談研修で得た技法を取り入れながら，個別面談を継続した。 (2)学校評価アンケートにみる「自分の進路を実現するために努力している」生徒の割合は，1年61%→2年66%→3年87%（12月調査文）。進路講演会（1年9月，2年3月），「大学生に聞く」（1年3月），志望理由書の作成（2年2～3学期），就職講演会（2年2月）などの取り組みを通して、進路実現のための動機づけを行った。また，「プレミアム補習」（1年），「プレゼロ（早朝補習）」「火曜日スペシャル補習」（2年），本校OBOG大学生を招聘する「土曜自習・質問教室」（1，2年）など，学年の特性に応じて学力向上対策を行った。 (3)平成27年11月国公立大学志願者数は、1年165名（60.7%）2年155名（56.3%）3年109名（40.9%）である。 (4)センター試験出願者は149名（昨年度比-7名）。	C	(1)～(4)これまでの取組みに加え，「平日自習・質問教室」を開催し，毎週放課後，本校OBOG大学生をアシスタントティチャーとして迎えて生徒からの質問に対応する。夏季休業中に2年，3年で勉強合宿を実施し，学習意欲の高い生徒の学力と志望をより高く引き上げる。さらに，保護者対象の進路セミナーを各学年1回ずつ計画的に開催する。
Ⅲ　コース（探究・総合・体育）における特色ある教育活動の推進	全てのコース	(1)各学年団のやり方で3年間の指導がなされている部分がある。	(1)3年間を見据えた「八頭高プラン」を作成する。	(1)今まで各分掌で蓄積してきた指導計画などを整理・統合して「八頭高プラン」を作成する。	(1)新入生に向けた「八頭高プラン」（高校3年間の流れと年度計画表）の原案を検討中である。	D	(1)キャリア教育全体計画、年間行事予定をもとに原案を作成し、まとめたものを新年度に提示したい。
	探究コース	(1)探究ゼミでは「生徒自身が課題を見つけ研究テーマを設定する」活動により、生徒自身が主体的に学ぶ姿勢を身に付けることができた。一方、探究ゼミ担当教員の負担が大きく、ゼミ全体像の改革が望まれる。 (2)鳥取大学体験実習を全学部で実施することができなかった。 (3)学年の自主的な取り組みとして夏季休業中に、2年生希望者が東京大学主催難関大学説明会に参加した。	(1)探究ゼミ活動、ゼミ発表の質を向上する。（事後アンケート） (2)鳥取大学体験実習の継続と満足度を向上する。（事後アンケート） (3)探究コース生徒の学習意欲を向上し、より高い進路目標を設定して志望校を明確にする。（H27授業評価アンケート）	(1)探究ゼミにおいて、鳥取環境大学、企業、地域との連携を図るなど、ゼミの改革を図る。 (2)鳥取大学との連携を密にし、早期に日程を具体化する。 (3)都市部で行われる主要大学説明会などへの積極的参加を進める。さらに、2年研修旅行を生徒が企画し、魅力的な訪問先・内容で実施する。	(1)9月29日に中間発表会を実施。12月19日に最終発表会を実施。最終発表会については、校外の八東体育文化センターにて公開（保護者、1年生生徒対象）で行った。中間発表、最終発表ともに鳥取環境大学より2名の教授を指導助言者として招き、生徒の感想も好評であった。 (2)鳥取大学体験実習は3学部7コースで実施した。担当教授のご尽力で昨年より大幅に実施コースが増えたものの、大学の性質上、文系生徒が希望するコースがどうしても少なくなってしまった。 (3)2年研修旅行2日目以降、探究コース独自日程で実施。生徒の希望も取り入れたことで、探究コースの特色を出すことができた。その後学習への取組は、授業アンケート「自宅で（塾以外）毎日学習する」によると、2年12月探究コース53%（校内平均32%）である。	B	(1)年内に最終発表まで実施したことから、日程がタイトであった。最終発表を土曜日に実施したことで、部活動に影響が出た。次年度の日程調整の必要がある。 (2)鳥取大学との連携を継続しつつ、文科コースの希望に沿うような大学との新たな連携を考える必要がある。 (3)予算的に現状と変わらないのであれば、今年度のような日程が限界なのではないか。
	総合コース	(1)オープンキャンパスの充実など大学研究の環境は大きく変化しているが、2学年研修旅行内容は10年前と大きく変わっていない。	(1)研修旅行が生徒の進路意識高揚に役立つ。	(1)研修内容に生徒の興味・関心に基づいた研修先を設定するなどの工夫をする。	(1)研修内容について、複数の選択肢を提示し、生徒の興味・関心により研修内容を選択させた。研修先はさまざまな企業であり、生徒の進路意識の高揚につながった。	B	(1)次年度も、研修先は生徒に選択させる方法をとりたいが、選択肢を設定する前に、生徒の希望を取り入れることも検討したい。
	体育コース	(1)平成25年度12人（全国大会出場全体22人の54%）から37人（全体60人の62%）に増加。 (2)上級生(3年生）がリーダーシップをとって運営できて いる。 (3)コンディショニング講習会・エアロビクス講習会に積極的に取り組んだ。	(1)全国大会出場者数の増加。 (2)学校生活、運動部活動の運営においてリーダーとなる体育コース生の増加。 (3)特色ある行事の充実。	(1)(2)体育コース集会、教科担当者会を定期的に開催し、人間的成長を支援する。 (3)体育コース独自の事業において、講習内容の見直しを検討しながら充実した事業を目指す。	(1)全国大会出場者数の増加が達成できなかった。 （H25 12人　H26　37人　H27　19人） (2)～(3) コースの広報活動（パンフレット作成、メディア活用）は目標達成。 コース行事の講師選定については、今年度大きく変更した。すぐには結果が出にくいものであるが、競技力向上につながっていくか今後も様子を見ていきたい。 コース集会、連絡会は充実したものとなった。コース生の日常の生活や授業についての把握ができ、結果、学力面でのサポートが部顧問もできた。	B	(1)全国大会出場者数の増加を目指す。 (2)～(3) 新たな行事導入（大学、専門学校と連携して資格取得）を導入する。 強化指定部の生徒募集の行い方について検討。
Ⅳ　八頭タワープロジェクトの充実	八頭町内中学校等との連携推進	(1)小中高の担当者が建設的な関係性を構築でき、スクラムリーダー会が有効に機能している。 (2)数学科によるプロジェクトならびに英語科文科省事業を有効活用し，課題の抽出とその克服に向けての研究実践を進行中。 (3)中高合同教科指導研修会を複数回開催するなど，指導ポイントの共有化を進めている。 (4)中学生・高校生が交流する機会を複数回設定し活動した。	(1)スクラムリーダー会が地域連携の主体となる。 (2)数学・英語科の小中高での課題を共有した上で、連続した学びの研究を進める。 (3)小中高が連続した学びの必要性を理解し、効果的な指導法を研究・実践する。 (4)中学生と高校生の学び合いを通して学力向上を目指すとともに、中高の現状を把握して教科指導を研究する。	(1)地域との関わりをいかにして強くしていくかについてより積極的な動きを検討し、町内小中高の連携を太くしていく。 (2)小中高担当教員が課題を抽出、分析し、教科指導力向上を目指す指導案を作成、実践する。 (3)中高教員の授業研究、授業交流を促進し、効果的な指導法を開発し、実践する。 (4)中学生・高校生がともに学び合いができる事業を計画し、教材研究や実践を行う。	(1)担当者での協議・検討はできているが、今まで以上に広がりを持たせたり、連携を太くする方策を打ち出せなかった。 (2)生徒学びの姿勢や学習状況の調査から課題を見つけ、来年度の課題を設定することができた。 (3)英語・数学とも引き続き、研究授業の相互参観等を行い、課題の共有化などを行っている。特に数学科では数学的な表現力を高める指導の工夫」をテーマに小中高での研究授業を実施し、協議することができた。 (4)日程調整ができず、「冬季数学特別勉強会」が未実施である。八頭高ライフ体験では新たに智頭中と若桜学園中学校を加え、生徒主体の運営で実施できた。	B	(1)継続して検討・協議していく。 (2)課題設定から教科指導案の研究・協議を進め、実践を行う。また事後に検証を行い見直しをしていく。 (3)継続して取り組む。 (4)日程調整を前年度行い、早い段階で計画・協議をしていくようにする。

評価基準　A：十分達成〔90%〕 B：概ね達成〔80%程度〕 C：変化の兆し〔60%程度〕 D：まだ不十分〔40%程度〕 E：目標・方策の見直し〔30%以下〕